

罰ゲーム告白で弄ばれたので消えたら、

7年後元彼に執着溺愛SEXで愛の中出しまで堕とされる話

サンプル（一部抜粋）

「雫はもう28歳なのに、浮いた話一つないなあ。」

大型連休。親戚の集まりでおじさん達にからかわれるように、小言を言われる。

「……恋愛は：苦手だから。」

私は適当に愛想笑いを浮かべ、そう返す。

おじさん達はそんな私を見て、不満げな顔をして

「これだから最近の若い女は：」

とくだらない偏見をぐちぐちと語る。

「……」

私だって：彼氏ができた事くらいある。たった一度だけ：だけど。

蓮見怜って名前の同じサークルの先輩。：思い出したくもない名前。

2個上の先輩で、カッコよくて：かなりモテる人だった。

私も他の女子達と一緒にあって、先輩に憧れていたな。

そんな先輩にある日、急に呼び出されて

「実は相沢の事が好きだったんだ。付き合ってくれる？」

なんて告白をされ…当時の純粹だった私は、疑う事もなく告白を快諾した。

元々ほとんど話した事もなかったのに、この時点からおかしかったのに、そんなことにすら気付けないほどに舞い上がっていた。

まさか私が先輩に選んでもらえるなんて…！って。

私の初めては全て…あの男に捧げてしまった。

初めてのデートも、初めて異性と手を繋いだ事も、ファーストキスも…身体も。

「……」

痛かったけど…確かに幸せだと感じていた。

「雫…大好きだよ。」

あの男の甘い声を…私は今でも覚えている。でも私はこの男が大っ嫌いだ。だって、あの告白は罰ゲームだったから。

付き合って3ヵ月が経った頃……だっけ。

先輩に会いに行こうと部室に向かって歩いていたら時……近くの校舎裏から笑い声が聞こえてきた。

「で、彼女はだよw」

「雫？可愛いよ。」

「でもそろそろ振るんだろ？」

だってお前、ボウリングで負けた罰ゲームで告白しただけじゃんw

しかもサークルで一番『微妙』な女子で、俺たちが選んで押し付けた女だぞw」

「え……？」

まさかの事実思わず声が漏れる。

「あれ、そんな理由で選んだんだっけ？」

「そうだよ。怜だって『あの女かよ』って言ってたじゃんw」

「そうだっけ……w」

ゲラゲラと下品な声が聞こえ、私は思わず逃げてしまった。

サークルで一番、微妙。

その言葉が、ナイフのように胸に突き刺さる。

罰ゲーム……あの幸せな3ヵ月が、全部嘘？

手を繋ぐだけでドキドキして、緊張しながらしたキスも……彼にとっては、ただの「ゲームのノルマ」だったなんて……。

…涙も出なかった。ただ、身体の芯から冷えていくような感覚だけがあった。彼に触れられた場所が、すべて汚されたような気持ちで、何もかもが崩れた瞬間だった。

（中略）

数十分後。

「全員、一旦手を止めて。」

本社から人が来たのか、上司が大きな声でそう言う。

「……」

早くこの仕事を終わらせたいのに……。そう思いながら小さく息を吐いて、視線を落としたままゆっくりと椅子を回した。

「こちら、本社から来られた蓮見怜さんだ。」

「え？」

落としていたバツと上げる。

「げ……」

嘘でしょ……。嫌な汗が全身から吹き出るように流れ出す。

大学時代、明るく染められていた髪は深く落ちていた黒に染まり、纏う雰囲気も学生時代のそ

れとは似ても似つかない。

整った顔立ちはそのままに、大人の男としての色気を宿したその姿に、全身の血の気が引いていく。

「最悪……」

なんで今更……？そう思いながら、相手に気付かれないように下を向く。

「蓮見です。よろしくお願いします。」

あの男の甘い声……

「雫、愛してるよ……」

過去に耳元で囁かれたあの声と……同じ。

「はあ……」

いちいちあんな最悪な過去を思い出す私も私だ。……まあ……私にとっては最悪の意味で忘れられない人だけど、あの男にとっては、私は数多の女の中の一人。記憶にも残っていないような些細な駒に過ぎないはず。大丈夫。そこまで警戒しなくていい。

私は必死で自分を律し、震える呼吸を整えて顔を上げた。

（中略）

「……もう……先輩に関わりたくないんです……」

私は両手で先輩の胸をグイッと押す。

だけど先輩はビクともせず、私の手首をグッと掴んできた。

「はな…して！」

腕をねじって、逃げようとするけど…力じゃ敵わなかった。

「昔みたいに怜くんとは呼んでくれないんだ？」

掴んだ手首にぐっと指が食い込むほど強く握られる。

「っ…」

痛みで顔をゆがめながら、私は首を小さく横に振る。

「…また…ゲームですか？」

「ん？」

「また何かの賭けに負けて、私に近づいてきたんですか…？」

「…違うよ。」

「…じゃあなんで…」

「言ったじゃん。会いたかったからって。」

「あんな罰ゲームで…私の全部を奪ったくせに…？」

今さらなんですか…」

私があの時、どれほど嬉しかったか…どれだけ幸せだったか…。

『雫、愛してる。』

そう言われる度に、死んでもいいと思うほどに……幸せだったのに……。

「……今更……ねえ。」

唇を噛み締め、必死で涙を堪える私の顔を見て、先輩の顔からスッと余裕の笑顔が消えた。小さくため息をついたかと思うと、ぐっと顔が近づく。

(中略)

「先輩……待ってっ……!」

そう言った瞬間、じゆる……つと音を立てて、乳首を舐められた。

「……あっ……ああ……っ、や……乳首……ひ……う……あ……」

先輩の口の中が熱い……。舌が乳首を上下に擦るように、口の中でぬるぬると動く……。先輩は伏せていた瞼をゆっくりと上げ、じつと私の目を見据える。

反応を一つ一つ確かめるように、強弱をつけて乳首を舌で愛撫する。

「あ……ああ……っ、せん……ぱい……っ……ゴリゴリ……やだ……っ」

身体が刺激に耐えきれず、わずかに震え始める。

なんで……大っ嫌いな男の愛撫なのに、気持ちよくなっちゃうの……。この男にだけは……屈したくないのに……。

なんでそんなに……優しく舐めたりするの……。

「ひ……う……ああ……っ、大っ嫌い……っ、嫌い……っ、あ……は……ああ……っ」

自分に言い聞かせるように、何度も嫌いと口にしながらも……乳首に与えられる暖かい快感が身体を走る。それが……耐えられない……。

「……っ、は……ああ……っ」

気が付くと私は先輩のふわっとした柔らかい髪を両手で撫で、頭を押さえて乳首にもっと刺激が入るように……誘導してしまっていた。

くすつと軽く先輩が笑ったのが聞こえたけれど……ゴリゴリと舌で乳首を擦り上げられ、

「あ……あおっ……っっ!!」

身体をびくんと跳ねて、快感が一気に脳内へと流れ、身体が軽く痙攣してしまっていた。

「……あれ。乳首だけで軽くイっちゃったの？」

ゆっくりと唇を離して、クスクスと嬉しそうに笑う先輩……。

「ちが……」

「俺と別れてから、何人と付き合った？」

先輩は私の言葉を遮り、ぎゅつと私を抱き寄せて低い声でそう呟く。

「……誰とも……」

「……じゃあ、雫を知ってるのは俺だけ？」

「……やっぱり嘘。」

「え？」

「いっぱい付き合っだし、先輩の事なんて忘れてだし、先輩の事なんて…大っ嫌い…」

これだけ気持ちよくさせられて、乳首だけであんな事になるなんて人生で初めてで…またこの男に初めてを奪われたと思うと悔しくて…私は早口で嘘をつく。

「……」

私を抱きしめる手にぎゅっと力が入って、先輩の指が私の身体へと食い込んでいく…。

「…先輩…っ、痛い…」

「…嘘だろう？」

「え？」

「雫が嘘をつく時、早口になるのを知ってるんだよ。

だから嘘なんだろうけど…それでも、気分は良くないな。」

先輩は怒った声でそう言って、私を抱きしめたまま、スカートの中に手を突っ込む。

「や…そっちは…だめ…っ」

必死で身体を振る…。でも…先輩の力には敵わなくて、あっという間に下着越しに割れ目をなぞられた。

「ひう…っ、あ…あ…っ」

（執着溺愛SEXの全容は製品版にて）